

# 報 告 書

令和8年7月31日

座間市議会議長

松 橋 淳 郎 殿

座間市公明党 団長 伊 藤 多 華  
加 藤 学  
鈴 木 一 寿  
高 柳 浩 子

次のとおり報告します。

1 視察日時 令和8年5月18日（月）～20日（水）

2 視察先

- （1）島根県松江市
- （2）鳥取県米子市
- （3）鳥取県庁
- （4）鳥取砂丘 砂の美術館

3 視察項目

- （1）業務効率化の取組について
- （2）地域包括ケアシステムについて
- （3）「子育て王国とっとり」の取組について
- （4）「鳥取砂丘砂の美術館」の取組について

4 概要 別紙のとおり

令和8年5月22日

座間市議会議長

松 橋 淳 郎 殿

座間市公明党

伊 藤 多 華

## 視察所感

### (1) 業務効率化の取組について

松江市の業務効率化・D X推進に関する視察内容は、単なるデジタル化の紹介にとどまらず、合併後の行政課題、人材不足、財政制約という厳しい現実に向き合いながら、持続可能な行政運営を目指してきた過程が非常に丁寧に整理されており、大変参考になる内容でした。

特に印象的だったのは、平成の大合併によって拡大した行政区域や公共施設、職員体制を時代の変化に合わせて段階的に見直してきた点であり、第1次では、量の見直しとして職員削減や組織統合、第2次では公共施設適正化や財政健全化、第3次及び第4次ではD Xによる業務改革へと、課題に応じて改革の軸を変化させている点は非常に素晴らしく、計画行政の重要性を感じました。また、I C T化からD Xへ考え方を進化させ、単なる電子化ではなく、業務そのものを変えるという視点を明確に持っている点も印象深く、電子決裁、ペーパーレス化、オンライン申請、R P A、生成A I活用などを通じ、職員が単純作業から企画業務や判断業務へシフトできる体制づくりを進めていることは、今後の自治体運営において極めて重要な方向性であると感じました。さらに、「書かなくても済む窓口」や「行かなくても済む窓口」といった市民目線の改革が、単なる効率化ではなく、市民サービス向上に直結している点も大変参考になり、窓口対応時間の短縮やコンビニ交付の推進などは、市民利便性向上と職員負担軽減を同時に実現する好事例であり、本市でも研究すべき取組であると感じました。

本市においても、人口減少や人材不足が進む中、松江市の先進事例を参考にしながら、業務の棚卸しやデジタル活用を進め、市民サービス向上と職員負担軽減の両立に向けた取組を検討していく必要があると感じました。

### (2) 地域包括ケアシステムについて

今回の米子市の地域包括ケアシステムの説明を通して、単なる制度説明ではなく、高齢者が住み慣れた地域で、自分らしく暮らし続けるために、行政が本気で地域全体を動かそうと

している姿勢が非常によく伝わってきました。

特に印象的だったのは、フレイル対策を介護予防という狭い枠で終わらせず、地域の日常の中に自然に溶け込ませている点です。市内公民館29か所を活用したリモート運動体験や、予約不要で参加できる仕組みなど、「来てもらう福祉」ではなく、「気軽に关われる福祉」を目指していることが感じられました。また、ダンスやeスポーツなど、多様なメニューを取り入れようとしている点も、高齢者施策を前向きで明るいものに変えようという意識が伝わり、大変参考になりました。さらに、多職種連携についても、会議を開くことが目的ではなく、課題解決を軸に連携するという考え方が非常に現実的であり、実践的だと感じました。特に、地域包括支援センターが悩んだ際に、市が寄り添いながら伴走支援を行う姿勢は、委託任せにしない行政の責任感を感じました。

身寄りのない高齢者支援については、単に制度を作るだけではなく、まず実態把握と関係機関との情報共有から丁寧に始めている点が印象的でした。急性期病院や地域包括支援センターへのヒアリング、そして実証事業において社協・ケアマネ・法律職が連携しながら取り組んでいる姿は、地域で支えるという地域包括ケアの本質そのものだと感じました。中でも、「一人暮らし安心ガイド」や「人生設計フェア」は、問題が起きてから支援するのではなく、元気なうちから備える文化をつくろうとしている点が素晴らしいと感じました。

今回の視察を通して、本市においても6つの地域包括支援センターがそれぞれ独自に取り組まれています。人口減少や担い手不足が進むこれからの時代においては、行政だけで抱え込まず、多様な主体とつながりながら支える仕組みが不可欠であり、米子市の取組はその先進的なモデルの一つであると感じました。本市においても、地域特性に合わせながら、フレイル予防、特に身寄りのない高齢者支援など、今回学ばせていただいた視点を今後の施策に活かしていく必要があると強く感じました。

### (3) 「子育て王国とっとり」について

今回の視察内容からは、鳥取県が「子育て王国」を単なるスローガンではなく、県全体の政策理念として位置付け、市町村と連携しながら切れ目のない支援を具体的に積み上げている姿勢が強く伝わってきました。

特に印象的だったのは、出会い・結婚から妊娠、出産、保育、在宅育児、子育て支援までを一体的に支えている点です。行政が「どのような子育ての形が正しいか」を押しつけるのではなく、専業主婦、自営業世帯、共働き世帯、祖父母との子育てなど、多様な子育ての在り方を尊重し、それぞれに必要な支援を整えていることに、非常に先進性を感じました。

また、待機児童ゼロを長年維持している背景には、単なる保育施設整備だけでなく、保育士確保や在宅育児支援などを含めた総合的な施策があることも学ぶことができました。特に在宅育児世帯への月額支援は、保育園へ預けることだけを前提にしない柔軟な発想であり、家庭ごとの育児設計を支える取組として大変参考になりました。

さらに、プレコンセプションケアについても、「妊娠・出産を強制するものではない」という丁寧な姿勢を持ちながら、若い世代に寄り添う形でオンライン相談やデジタル保健室の整備を進めている点に、現代的な課題意識と配慮を感じました。

加えて、県が主体性を持ちながらも、市町村との意見交換を重ね、「全県で均質なサービスを提供する」という考え方を大切にしていることも大きな特徴でした。トップダウンだけではなく、現場や当事者の声を施策に反映させる姿勢が、鳥取県の機動力や実効性につながっていると感じました。

今回の視察を通じて、人口減少や少子化が進む中でも、「地域全体で子どもと家庭を支える」という明確なビジョンを持ち、県と市町村が一体となって挑戦を続けている鳥取県の取組は、大変学ぶ点が多く、神奈川県でもぜひ、取り組んでいただきたい内容であり、本市においても今後の子育て支援施策を考える上で大いに参考になる視察となりました。

#### (4) 「鳥取砂丘 砂の美術館」について

今回の視察内容から強く感じたのは、砂の美術館が、単なる観光施設ではなく、地域資源をどう磨き上げ、唯一無二の価値へ昇華させるかを体現した取組であるという点でした。

特に印象的だったのは、「突き抜けないと観光コンテンツとして成功しない」という館長の言葉です。砂丘という地域資源を単なる自然景観として終わらせず、砂像という形で世界唯一の屋内専門美術館へ発展させた背景には、強い挑戦意識と継続的な試行錯誤があったことが伝わってきました。

単に施設単体の成功ではなく、宿泊や周辺観光への波及効果を生み出し、地域経済全体へ貢献している点も非常に重要だと感じました。来館者の多くが県外客であり、高い宿泊率につながっていることから、観光施策として高い成果を上げていることが理解できました。

一方で、専門人材の継続的確保や、指定管理制度の中でノウハウをどう継承していくかといった課題についても率直に共有いただき、成功の裏側には地道な人材育成や運営努力があることも実感しました。地域の子どもたちに砂像制作体験を行うなど、将来を見据えた取組も大変参考になりました。

今回の視察を通じて、地域資源の大小ではなく、その地域ならではの強みをどう磨き、どう物語化し、継続的に発信するかということが重要であることを改めて認識しました。観光地として大規模な資源を持たない自治体であっても、地域特性を活かした独自の取組を積み重ねることで、新たな魅力創出につながる可能性を感じる大変有意義な視察となりました。

令和8年5月27日

座間市議会議長

松 橋 淳 郎 殿

座間市公明党

加 藤 学

## 視察所感

### (1) 業務効率化の取組について

本視察では、松江市の先進的な「庁内バックオフィス」による業務効率化を調査した。同市は業務を「コア（判断・応対）」と「ノンコア（入力・発送等）」に完全分離し、ノンコア業務を会計年度任用職員やRPAへ集約・自動化している。保育所選考事務では、従来5名で7日間要した作業をシステム化により10秒に短縮するなど、年1,790万円の時間外勤務削減を達成している。

本取組を本市へ導入した場合、登録数約10万件を誇る座間市LINE公式アカウントでのオンライン申請と裏方のバックオフィスが直結し、市民サービスが劇的に向上する。また、正規職員が相談窓口等の市民応対や政策立案に注力できる体制が構築され、人件費の最適化や財政効果も期待できる。

一方で、システム構築の初期投資に対するシビアな費用対効果の検証や、職員のデジタル格差・紙文化からの脱却に伴う摩擦が懸念される。また、国や県が絡む業務への横展開には高い難易度が伴う。

しかし、本市への適用に当たっては、市独自で完結する定型業務等のスモールスタートから、段階的に対象を拡大していくロードマップの策定を検討する価値は十分にあるとの所感を持った。

### (2) 地域包括ケアシステムについて

本視察では、米子市の先進的な「高齢者等安心サポート事業（実証事業）」による身寄りのない高齢者への支援体制を調査した。同市は本人の契約能力があるうちに利用契約を結び、社会福祉協議会が支援計画を策定している。入院費の支払いや光熱費手続き等の生活実務は月2万円の委託料でケアマネジャーへ委託し、医療同意や金銭保証は対象外とすることで、行政、社協、ケアマネ、権利擁護機関で負担を分散する持続可能な仕組みを構築している。

本取組を本市へ導入した場合、現場のケアマネが善意で行っている無償の私的援助（シャドーワーク）が公的サポートへ移行され、関係者の負担が劇的に軽減される。また、早期

から本人の意向を整理し、意思に沿った医療や介護を提供できる安心安全な地域包括ケアシステムの構築が期待できる。

一方で、国のモデルに見られるような高額な支援パッケージに対する費用負担の壁や、本人が受診を拒み、医療や包括支援センターにつなげられない孤立ケースへの初期対応の難しさが懸念される。また、どこまで第三者で対応可能かという法的限界のシビアな検証が伴う。

しかし、本市への適用に当たっては、各機関の役割を明確に分担し、健康なうちから本人の意思を支える持続可能な体制構築に向けたロードマップの策定を検討する価値は十分にあるとの所感を持った。

### (3) 「子育て王国とっとり」について

本市の子育て施策における喫緊の課題は、慢性的に県内ワースト3位以内に位置する待機児童問題の早期解消と、核家族化に伴う子育て世代の「孤育て（孤立化）」の防止である。これに対し、鳥取県では県及び市町村が強固に連携し、国の一歩先を行く切れ目のない先進的施策を展開している。

同県では、不妊治療や産後ケア、保育料無償化の全県均一化を県が調整、主導している。施策の軸として、平成18年から維持する待機児童ゼロを支える保育士確保策のほか、全国初となる育休給付金等を受給していない在宅育児世帯への月額3万円給付を実施している。このことにより家庭の経済的不安を解消し、保育ニーズの分散化にも成功している。さらに、オンラインで専門家に相談できるデジタル保健室の整備や、中小企業への伴走型支援による男性育休の促進など、時代に即した環境整備を進めている。

本視察を通じ、広域自治体との柔軟な役割分担や、本市独自の孤立化防止につながる多様な育児ニーズに寄り添うアプローチの重要性を強く認識した。

### (4) 「鳥取砂丘 砂の美術館」について

本視察では、鳥取市の砂の美術館における地域資源を活用した観光振興事業を調査した。同館は砂丘観光客の長期的な減少を受け2006年に発足し、2012年に世界初の砂像専門屋内展示施設を開設した。毎年テーマを全面刷新するリニューアル型運営でリピーター率約30%を維持し、2018年より指定管理料なしの利用料金制に移行した。年間来場者40万人を損益分岐点とし、令和7年度は黒字化を達成している。経済波及効果は125億円超、来場者の92.5%が県外客、71.5%が宿泊客であり、地域経済への貢献も顕著である。

本取組を本市に当てはめた場合、大風呂まつり・ひまわりまつり以外に大型観光資源を持たない本市において、「世界でここだけ」という突き抜けたコンテンツを独自資源から生み出せるかが問われる。

一方で、指定管理料なし、利用料金制の財政設計は今後の公共施設運営に応用価値がある。しかし、地域固有の資源と一体となったコンテンツ設計なくして持続的な集客は困難であり、本市の観光資源を再定義するロードマップの策定を検討する価値は十分にあるとの所感を持った。

令和8年5月22日

座間市議会議長

松 橋 淳 郎 殿

座間市公明党

鈴 木 一 寿

## 視察所感

### (1) 業務効率化の取組について

松江市の業務効率化の取組は、市町村合併後の組織規模拡大や人口減少、少子高齢化の進展、厳しい財政状況への対応を背景として進められている。特に平成17年の市町村合併以降、旧自治体間で異なる制度や事務手続き、組織体制の統合が必要となり、限られた行政資源の中で持続可能な行政運営を実現することが大きな課題となっていた。そのため、段階的な行政改革大綱の策定と見直しを継続しながら、業務改善や組織再編に取り組んできたとの説明があった。

行政改革を進める上での基本的な考え方として、「最小の経費で最大の効果を生み、その成果を市民に還元する」という理念を一貫して掲げている点が非常に印象的であった。これは単なるコスト削減や人員削減ではなく、行政サービスの質を維持・向上しながら、効率的な行政運営を実現することを目的としているものである。

具体的な取組としては、行政DXの推進、指定管理制度の導入、民間委託、市民やNPOとの協働など、多様な手法を組み合わせながら行政運営を進めていた。特に印象的だった点は行政が全ての公共サービスを担うという従来の考え方から転換し、行政でなければ対応できない分野へ重点化する考え方である。民間事業者や地域団体等が担える分野については積極的に役割分担を図り、行政資源をより必要性の高い分野へ集中している点が参考になった。

また、DX推進についても、単純にシステムを導入することが目的ではなく、まず「その業務が本当に必要なのか」という視点から見直しを行っていたことが印象的であった。スクラップアンドビルドの考え方を取り入れ、既存業務をゼロベースで検証し、不要な業務を整理した上で効率化を図っていた。単にデジタル化するだけでは、従来の非効率な仕組みをそのまま電子化するだけに終わってしまうため、業務プロセス全体を見直す姿勢が重要であることを感じた。

一方で、こうした行政改革を進めるためには、職員の理解や意識改革が不可欠であり、組織変更や業務改善の過程では一定の調整負担も発生することが推察された。また、業務効率



化は短期間で成果が表れるものではなく、継続的な改善と検証を積み重ねる必要があると感じた。

今回の視察を通じて、業務効率化とは単純な経費削減策ではなく、市民サービス向上を目的とした行政改革そのものであることを再認識した。本市においても、電子計算事業や庁内DX推進を進める中で、システム導入だけにとどまることなく、業務自体の必要性や運用方法を見直し、AIやRPA等の新技術活用も含めた業務改革を進めていく必要があると感じた。

## (2) 地域包括ケアシステムについて

米子市の地域包括ケアシステムは「住み慣れた地域で支え合い、生きがいを持ち、自分らしく暮らせるまちづくり」を基本理念として、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で生活を継続できるよう、医療・介護・予防・住まい・生活支援を一体的に提供することを目的として推進されている。少子高齢化が進む中、介護需要の増加や支援体制の強化が全国共通の課題となっているが、米子市では単に介護サービスを拡充するだけではなく、地域全体で支え合う仕組みづくりに重点を置いている点が特徴である。

今回の説明では、健康寿命延伸の取組としてフレイル予防を重点的に推進しているとの説明があった。従来の介護予防事業では、比較的高齢層を対象にした運動教室が中心であったが、米子市ではより若い世代から健康づくりへ関心を持ってもらうため、ICTを活用したフレイルチェックやオンラインによる介護予防教室、公民館等での地域展開を進めているとのことであった。さらに、eスポーツ、ボッチャ、ダンス等多様なメニューを導入することで参加者の裾野を広げ、健康づくりを「楽しみながら継続できるもの」として定着させようとしている点が印象的であった。

また、多職種連携については、新たな会議体を増やすのではなく、既存の地域ケア会議を最大限活用していた。特に印象的だった点として、会議を開催すること自体を目的化せず、現場で生じている具体的課題を抽出し、その解決を中心に据えている点である。顔の見える関係づくりや情報共有も重要ではあるが、それ以上に「今起きている課題をどう解決するか」を軸としていた。

さらに、地域包括支援センターについては全て委託形式で運営しているものの、各センターが課題抽出や多職種連携に悩んだ場合には、市が積極的にバックアップを行う体制を構築していた。現場へ全てを任せるのではなく、行政が継続的に支援する姿勢も非常に参考になった。

一方で、多職種連携を進める中では、会議自体が目的化してしまうことや、地域ごとの課題把握の難しさなど、運営上の課題も抱えているとの説明があった。地域包括ケアシステム

は制度を整備すれば完成するものではなく、継続的な改善と現場支援が必要であることを改めて感じた。

今回の視察を通じ、高齢化社会への対応は医療や介護施策のみではなく、地域全体の支え合いの仕組みと一体で進めていく必要があることを再認識した。本市においても、自治会、地域包括支援センター、医療機関、地域活動団体等との連携を更に深めながら、高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らし続けられる環境整備を進めていくことが重要であると感じた。

### (3) 「子育て王国とっとり」の取組について

鳥取県では、少子化対策を単独施策としてではなく、出会い、結婚、妊娠、出産、子育てまでを一連の流れとして捉え、切れ目のない支援体制を構築している。特に「若者や女性に選ばれる地域づくり」を重要視し、人口減少や少子高齢化の進行が著しい地方自治体において、将来的な地域の担い手確保を見据えた政策展開を行っている点が特徴である。

今回の説明では、単に子育て世帯への支援を充実させるだけではなく、各家庭が希望するライフスタイルや子育て環境を尊重し、多様な選択肢を保障するという考え方が強く印象に残った。特に、市町村間で財政力や医療資源等に差がある中でも、県が主導して保育料軽減、不妊治療支援、産後ケアなどを全県的に展開し、市町村間格差の是正を図っていた。また、特徴的な取組として、育児休業制度の対象にならない専業家庭や自営業世帯等に対して、0歳児世帯へ月3万円を支給する在宅育児支援制度を実施していた。

この取組は単なる現金給付ではなく、子育て世帯が生活環境や家庭状況に応じて育児方針を選択できるよう支援するものであり、保育園利用への過度な集中を避け、保育施設側の負担軽減にも一定の効果が期待されているとのことであった。

さらに、待機児童対策として、保育人材育成にも重点を置いており、県内教育機関と連携した職場体験や就職フェア等を継続的に実施していた。待機児童ゼロを維持するためには、施設整備だけではなく、人材育成を継続的に行うことが重要であることも改めて認識した。

一方で、継続的な施策実施には財源確保や人材確保が課題であり、市町村との継続的な調整や関係機関との連携が不可欠であることも感じた。

今回の視察を通じて、子育て支援とは単なる経済支援策ではなく、多様な家庭環境や働き方に応じた支援体制を構築していくことが重要であると感じた。本市においても、子育て世代のニーズをきめ細かく把握しながら、安心して出産・子育てできる環境づくりを更に進めていく必要があると感じた。

### (4) 「鳥取砂丘 砂の美術館」の取組について

砂の美術館は、鳥取砂丘の観光客減少という地域課題を背景として、地域資源である砂を活用し、新たな観光資源として創出された取組である。2006年から事業を開始し、現在では世界初の屋内型砂像専門美術館として運営されている。

当初は鳥取砂丘を訪れる観光客数が減少傾向にあり、「砂丘を訪れて終わる観光」から脱却し、新たな滞在型観光を創出することが課題となっていた。その中で、地域資源である砂を活用した砂像展示という発想が生まれ、試験的な展示会が成功したことを契機として、本格的な施設整備へ発展したとのことであった。

施設の最大の特徴は、世界旅行をコンセプトに毎年テーマを変更し、展示内容を全て刷新する点にある。通常的美術館は常設展示が中心であるが、砂の美術館では展示終了後に全ての作品を崩し、再び砂へ戻した上で新たな作品を制作するため、毎年訪れても新しい体験ができる仕組みとなっていた。

また、運営面では指定管理制度やスポンサー協賛を取り入れており、来館者約40万人が収支の一つの基準になるとの説明もあった。単なる施設維持ではなく、継続的な魅力発信と集客戦略が施設運営の根幹となっていることを感じた。

さらに印象的だった点として、将来の人材育成を目的に、子ども向けの砂像制作体験事業等も実施していた。地域資源に触れる機会を幼少期から提供し、将来的な担い手育成にもつなげていこうとする姿勢は非常に参考になった。

一方で、砂像制作に適した砂の確保や専門人材の育成、確保など、継続的運営に向けた課題もあるとのことであった。成功要因としては世界初という独自性だけではなく、鳥取砂丘という地域資源との親和性、天候に左右されにくい施設環境、継続的なリニューアルによる新鮮さの維持が大きいと感じた。

今回の視察を通じて、観光資源は単に存在するだけでは価値は生まれず、その地域資源をどのように磨き上げ、ストーリー性を持たせ、継続的な魅力として発信していくかが重要であると感じた。本市においても、大風まつり、ひまわりまつり、谷戸山公園など既存資源を個別事業として捉えるだけではなく、地域全体の魅力として連携・発信する視点が必要であると感じた。

令和8年6月18日

座間市議会議長

松 橋 淳 郎 殿

座間市公明党

高 柳 浩 子

## 視察所感

### (1) 業務効率化の取組について

松江市では、業務効率化の取組について、単なるデジタル化の推進にとどまらず、その効果を具体的な数値で把握し、検証している点が大変印象的でした。例えば、辞令書交付事務の省略や保育所入所管理業務の効率化により、年間635万円の経費削減を実現しているほか、AI・RPAの活用による職員の勤務時間削減効果を金額換算し、年間約1,790万円の経費削減につなげています。このように、取組の成果を定量的に示すことで、職員にも市民にも分かりやすい形で効果を共有していました。

また、業務効率化による内部的な効果だけでなく、市民サービスの向上についても、外部専門機関による評価やランキング、国が示す客観的な指標などを活用しながら成果を検証している点も参考になりました。さらに、デジタル化や利便性向上に関する具体的な数値目標を設定し、その達成状況を継続的に確認していることから、取組が単発で終わることなく、改善のサイクルが確立されていると感じました。

こうした業務改善によって生み出された時間や財源を、市民サービスの向上へどのように還元していくのかという視点も明確であり、効率化そのものを目的とするのではなく、市民の利便性向上や行政サービスの充実につなげることを重視している点は、本市においても参考になると感じました。本市においても業務改善の効果を客観的な数値で把握・検証しながら、持続可能な行政運営と市民サービスの向上の両立を図ることが重要であると考えます。

### (2) 地域包括ケアシステムについて

米子市の地域包括ケアシステムについて視察し、高齢者が住み慣れた地域で自分らしく暮らし続けるためには、医療・介護・予防・生活支援が一体となった地域づくりが重要であることを改めて認識しました。特に印象的だったのは、「住み慣れた地域で支え合い、生きがいを持ち、自分らしく暮らせるまちづくり」という理念のもと、健康寿命の延伸を重点施策として位置づけている点です。フレイル予防に力を入れ、市内全ての公民館で「ふらっと！運動体験」やリモート運動体験を実施し、高齢者が歩いて行ける身近な場所で気軽に健康づくりに取り組める環境を整備していました。ICTを活用したフレイルチェックから予防実

践へとつなげる仕組みが構築されており、健康意識の向上や参加者の増加など成果も現れているとのことでした。

また、地域包括支援センターを中心とした多職種連携の取組も大変参考になりました。新たな会議体を増やすのではなく、地域ケア会議を最大限活用し、現場で起きている課題の解決を軸に医療、介護、福祉関係者が連携する仕組みを構築していました。さらに、認知症初期集中支援チームでは認知症サポート医との連携体制を整備し、受診につながりにくい方への支援を行うなど、実効性を重視した取組が進められていました。

さらに、身寄りのない高齢者への支援についても先進的な取組が行われていました。庁内検討会を立ち上げ、医療・介護現場の課題把握や先進地調査を行ったうえで、「ひとり暮らし安心ガイド」の作成や人生設計フェアの開催を実施し、市民が早い段階から将来に備えることができる環境づくりを進めていました。また、社会福祉協議会やケアマネジャー、権利擁護機関などと連携した実証事業にも取り組んでおり、地域全体で支える仕組みづくりを進めていることに感銘を受けました。

高齢化の進展とともに、独居高齢者の増加や認知症への対応、支え手不足などの課題は全国共通のものとなっています。そのような中で米子市は「健康寿命を延ばし、人生の最後まで自分らしく豊かな生活を送る」という目標を掲げ、予防から生活支援、意思決定支援まで切れ目のない支援体制の構築を進めており、大変参考になりました。

### (3) 「子育て王国とっとり」について

鳥取県では「若者・女性に選ばれる地域づくり」を重視し、出会い・結婚から妊娠・出産、子育てまでを一連のライフステージとして捉え、切れ目のない支援を展開していることが印象的でした。特に、出会いや結婚の支援については、市町村単独では取り組みにくい分野であるにもかかわらず、県が主体となってマッチング支援やイベント開催を行い、若い世代の希望を後押ししている点は大変先進的であると感じました。

また、多くの自治体では妊娠・出産や子育て支援に重点が置かれていますが、鳥取県ではその前段階から支援を行うことで、少子化対策を総合的に推進していることが特徴的でした。さらに、男性育児休業取得応援奨励金や企業のファミリーサポート休暇等取得促進奨励金など、企業への支援を通じて働きやすい職場環境づくりにも取り組んでおり、特に制度整備が難しい中小企業に対しては、奨励金だけでなく専門家による伴走支援も行われていることから、社会全体で子育てを支える仕組みづくりが進められていると感じました。

また、県が市町村と連携しながら、保育料軽減や産後ケアの充実、在宅育児への経済的支援などを全県的に展開し、地域による格差の縮小に努めていることも高く評価できる点です。限られた財源の中でも、当事者の声を丁寧に拾い上げながら施策を展開している姿勢からは、「子育て王国」の名にふさわしい強い意志を感じました。

少子化対策は単一の施策で成果が現れるものではありませんが、鳥取県の取組は、若い世代が安心して将来設計を描き、結婚・出産・子育てを希望できる環境づくりを県全体で支えている好事例であると感じました。本市においても、ライフステージ全体を見据えた施策のあり方について検討していく必要性を感じた視察となりました。

#### (4) 「鳥取砂丘 砂の美術館」について

鳥取砂丘「砂の美術館」を視察し、地域資源を最大限に活用した観光振興のあり方について大変多くの学びを得ることができました。砂の美術館は、観光客の減少という課題に対し、鳥取砂丘の砂という地域資源に着目し、世界初の砂像専門美術館として発展してきました。当初は屋外での試験的な展示からスタートし、多くの来場者を集めた実績を基に、現在の常設施設へと発展した経緯からは、地域課題の解決に向けて挑戦を重ねる姿勢の重要性を感じました。

特に印象的だったのは、世界旅行をコンセプトに毎年テーマを変え、作品を全て作り替えることで、常に新たな魅力を生み出している点です。一般的な施設は整備後に内容が固定化しがちですが、砂の美術館は毎年リニューアルされることで来館の動機を生み出し、リピーター率約30%を確保しているとのことでした。観光施設においては、施設整備そのものではなく、継続的に魅力を発信し続ける仕組みづくりが重要であることを改めて認識しました。

また、来館者の多くが県外から訪れ、その多くが宿泊を伴うことから、地域経済への波及効果も非常に大きく、第16期展示では経済波及効果が125億円を超えたとの説明がありました。単なる集客施設ではなく、宿泊、飲食、交通、物販など地域全体に利益をもたらす観光コンテンツとして機能している点は大変参考になりました。

さらに、館長から「観光として成功するためには、他にはない独自性が重要である」とのお話がありました。本市には鳥取砂丘のような全国的観光資源はありませんが、今後のまちづくりや観光振興施策を検討する上で、大変有意義な視察となりました。